HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	グローバリゼーションとスピリチュアリティ復権
Author(s)	櫻井, 義秀
Citation	中外日報, 6-7
Issue Date	2004-07-13
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/763
Type	article
File Information	chugai_20040713.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

グローバリゼーションとスピリチュアリティ復権

櫻井　義秀

1　名古屋国際会議「人を生かすグローバリゼーションを求めて」

私は、二〇〇四年四月二八－三〇日に名古屋ガーデンパレスで開催されたアジア・ヨーロッパ財団と南山大学・アブレ大学（パリ）共催の上記会議に参加した。会議の準備は、奥山倫明氏（南山大学、宗教学）とダルウィス・クドリ氏（アブレ大学、イスラム研究）が献身的な活躍をされた。会議のテーマは「人を生かすグローバリゼーションを求めて：スピリチュアリティに基づく社会運動ができること」というものであった。

グローバリゼーションとは、元来金融、経済活動が国境を越えて世界市場を形成する動きを指すものであった。社会学者ウォーラスティンの議論では資本主義が勃興した 16 世紀以降、世界システムの形成が始まっているという。近年は、経済面に限らず、資本主義の中心国家が作り出す文化が周辺的途上国へ伝播していく状態や、「帝国」的地域紛争への介入や政治的覇権主義をも含意するものとなっている。この会議にはアジア・ヨーロッパ財団主催とはいえ、アメリカの研究者や活動家が殆ど招待されていない。それもそのはず、マクドナルド等のファースト・フードやハリウッド等の娯楽映画、或いはアメリカ英語を世界中に広め、金融市場、IT・ソフト市場を支配し、なおかつ中東、イスラム圏に介入を続けるアメリカこそが、現代のグローバリゼーションにおける覇権国家なのだ。

もちろん、この政治的構図は会議で公的に言明されたものではない。あくまでも、優勝劣敗の市場経済や過度の消費文化といったグローバリゼーションの否定的側面を改善して、人間らしく生活できる社会を作り上げるための方策を考えることが主要テーマである。しかも、その手段は、反米、反国家、反資本主義といった政治的イデオロギーではなく、スピリチュアリティに基づいた社会運動なのである。

2　グローバルな時代におけるスピリチュアリティの回復

まず、ダルウィス・クドリ氏が会議の趣旨説明を行った。グローバリゼーションに対抗するスピリチュアルな社会運動という彼の問題設定を筆者なりに説明すれば、こういうことであろう。近年のグローバリゼーションは先進国と後発国の一部に経済的繁栄をもたらしている半面、アフリカ、アジア、中南米、旧東欧諸国の途上国は、今でも貧困と政治的混乱に苦しんでいる。先進国内部でも中央と地方、上層と下層の経済格差は増大した。新自由主義的経済政策により、国際競争力を持たない産業は切り捨てられ、金のかかる手厚い社会福祉、教育、医療の予算は削減される。社会全体が競争、効率優先になり、潤いを

なくし、人心の荒廃すら見受けられるようになった。

このようなグローバル化の負の側面に警鐘を鳴らし続けているのが宗教者達、或いは宗教が社会の中核にある国の人々であった。確かに、現代社会において、人間の尊厳、人権に基づく様々な権利は法によって守られている。しかし、法の整備と経済社会の透明性・公平性だけで人間社会が維持されるものではない。文化を受け継ぎ、人間らしく成長できる空間こそ人間社会の中心であろう。それは、従来、家族であり、学校や職場といった生活圏を含む地域社会であり、文化伝統の基礎にある宗教であった。これらの共同体的社会がどんどん縮小し、機能を低下させれば、人としての社会性を陶冶する場がなくなる。

もちろん、ここで家族、地域、宗教の復権を叫ぶのは、よくてファンダメンタルな異議申し立てであり、大半は懐古趣味の域を超えるものではない。そこで、個人を抑圧することなく、人と人との関係、人と自然との関係をつなぎなおす概念として、スピリチュアリティが近年注目されている。一見、ニューエイジや精神世界を彷彿させる概念であるが、最近は終末期医療や嗜癖・依存症からの脱却という臨床の現場で用いられてきている。

個人が人としての尊厳を保ったまま死ぬこと、人としての尊厳を回復する過程において、個人を超えて他人や社会・自然といった大いなるものとつながる局面をスピリチュアルと表現するのである。神秘主義と訳されるスピリチュアリズムとはコンテキストを異にする。

スピリチュアルな社会運動とは、グローバリゼーションの過程で抑圧された人間性を回復する運動といってよい。それは燎原の火のごとく、全世界に広がりつつある。スローフードから田舎暮らし、環境保護、ボランティア、地域通貨、修養的瞑想法等々、多様なプロテストの方法・戦術があり、その効果の程も様々であるために全体像がなかなかつかみにくい。しかし、人間や社会のあり方を問い直し、政治経済関係に変わる新たな共同性を創出しようという試みが、地域社会のレベルで様々に試みられているのである。

3　スピリチュアルな社会運動と現代の危機

では、「スピリチュアリティ」や「社会運動」とは具体的にどのようなものか。参考までに招待講演者 4 人と、24 人の発表者、及び、各発表に対する 24 名の討論者の発表題目を訳してみたのが表である。私は最終セッションの討論者としてこの会議に参加した。議論の方向性のみ概括してみよう。

基調報告者の 4 氏に共通しているのは、現代への強烈な危機意識である。現代人は、頭部をカットされたブロイラーの成形肉を見て、元の鶏を想像することはない。ファルージャの市街戦は報道で知っていても、数百名の死傷者の光景を思い描くことは容易ではない

と、池澤氏は話を始めた。バーカー氏は、社会が近代化・合理化すると同時にスピリチュアリティや生きる意味の探求もなされると述べ、現代はグローバリゼーションの結果、勝ち組と負け組に分かれるという予測は一面的であり、皆勝つか、或いは皆負けるという可能性もありうると話をまとめた。この論点は案外日本では顧みられていないので敷衍する。

つまり、先進諸国ではいくら新自由主義経済を採用したとはいっても、国内の貧困、失業、治安の悪化を放置できない。将来に展望を見いだせず、社会的コミュニケーションも未熟なままの若者が増えることは、経済成長を支える人的資源の劣化を意味するだけではなく、勝ち組が負担すべき社会的コストを増大させることにもなるのである。例えば、正規職に就けずフリーターをやっている約四〇〇万人の若年層や、一説に数十万人とも言われる引きこもりの若者は、今、親が同居という形で生活の面倒を見ている。しかし、二〇年後には彼等の社会的処遇のコストは社会全体で保障することになるだろう。餓死者や犯罪の激増を防ぐためである。頑張ればなんとかなるという思いを若者達に抱かせるような社会でなくては、1.29 ショックと言われる出生率の回復はとうていおぼつかないであろう。

さらに言えば、一国だけ一人勝ちの時代でもない。アメリカが東西冷戦に勝利し、その後の国際紛争に介入する中で、テロリズムという政治手段で譲歩を迫る非国家的勢力に対して、アメリカを始め多くの先進国が直面することになった。紛争生起の地政学的な背景は様々であろうが、そうした活動に関わっていく多くの若者は社会的不公正に怒り、ファンダメンタルな組織で宗教的情熱の火に油が注がれる。ここでも若者の希望が問題になる。

タイのシワラク氏はタイ上座仏教の理念に基づき、現代社会の苦の根元を正視し、対立関係を融和する寛容と慈悲、アジア的スピリチュアリティの復権を唱えた。シュミット氏は、現代のエキュメニカル運動に通じる一六世紀以来の精神的リベラリズムの伝統をキリスト教世界はもたなければならないとする。このような二氏の主張は、他の発表者にも共通したものであり、地域的な宗教伝統に根ざした現代的スピリチュアリティが語られる。

これでは伝統間、文明間の対立が継続されるのではないかと懸念されるかもしれないが、無宗教・無信仰を自認するものが多数を占める文化風土の日本と、ヨーロッパ、アジア諸国の違いを考慮すべきである。個人のスピリチュアリティの芽とそれを涵養する場は、生活空間としての文化の中に求めざるを得ない。文化に宗教制度が極めて大きな影響力を持つ社会において、宗教から離れた自己認識や共同社会のあり方は考えられないだろう。

参加者の発言を聞きながら、日本にはスピリチュアリティの基盤として依拠すべき文化伝統があるのか、社会の共同的価値観があるのかと自問せざるをえなかった。

4　対話可能な共同的社会の創出

個々の発表は、一つにグローバリゼーションによって変容を迫られた地域社会がどのような抵抗運動を試みるのか、民族・宗教的マイノリティや女性達の人権保障と政治的参画をどう実現していくのかという具体的な話が多かった。その際、社会的資源として宗教団体のチャリティ機能、ネットワーク、宗教的価値観が活用されていた例が多い。もう一つの方向性として、イスラームと西欧的価値の対話、宗教に対する国民国家の統制、市民社会形成に果たす宗教の役割といった大きな課題の発表も見受けられた。発表者と討論者の組み合わせをヨーロッパとアジアの対話の形式にし、さらに、全体でジェンダーのバランスを取ったこともこの会議の方向性を示していた。

筆者は、世俗化されたスピリチュアリティ（人権、自由等の概念）を超えた宗教的スピリチュアリティ（キリスト教的精神性）により、グローバルな世界の公益（コモン・グッド）を作り上げようという発表に対して、そのためには目標達成に向けた具体的な実行手順が必要であるというコメントをなした。そして、何が公益であるかという了解に達したとしても、複数の可能な実現方法を評価する基準策定が難しいという問題を述べた。

その事例としてあげたのが、四月中旬に起きた日本人のイラク人質事件である。孤児支援のボランティア女性と、劣化ウラン弾使用の視察に出かけた一八歳の少年、フリーランスのカメラマンの三名がファルージャ付近でサラヤ・アル・ムジャヒディンを名のる集団に拉致され、犯行声明と脅された人質の映像が衛星テレビ局アルジャジーラを通じて全世界に放映された。三日以内の自衛隊撤退が人質解放の条件であったが、政府はテロリズムに屈しないという首相の声明を出した。結局、期限の四日後にイスラーム聖職者協会の介入により三名は解放された。筆者は人質二名と同じ北海道の人間として無事を喜んだ。

この間、国内では、憔悴した家族の言動をそのままネタとして流し続けたメディアを通して、「自衛隊撤退を声高に要求する家族像」と等身大以上に「献身的なボランティア、NGO活動家、ジャーナリストのイメージ」が形成され、それに対して異論、バッシングが噴出した。退避勧告を無視してイラク入りした若者に「自己責任」を突きつけた政府は狭量であった。彼等は経験豊富な海外支援 NGO と違って、危険地帯に入るには余りに準備不足であったことは確かである。しかし、海外のメディアやこの度の会議の参加者も同意見であったが、社会は手弁当で国際的な貢献を志した若者の意気を挫くべきではない。カメラマンにしても、大新聞や通信社が社員を退避させ、出来高払いのフリーの人間を使って取材させている状況がある。彼等のような存在なしに、現地の映像や声は国内に入ってこな

い。

この事件を振り返りながら思うのは、日本は「国際貢献」「生命の尊さ」といった抽象的な価値を認めつつも、特定の人たちが活動する具体的な問題状況では感情的になりすぎるか、筋論だけで議論する傾向が見られたことである。しかも、匿名でメールや手紙を家族に送りつけ、世間の名において家族や関係者を非難する人々が相当数いた。

自分と異なる考え、行動をなす他者の存在を認め、理解し、対話を開始することが、人間として共同性を作り出す最初の一歩である。現在、学校社会で、インターネット空間で、そして一般社会でも、ごく普通のコミュニケーションの困難さが様々な問題を通して語られるようになっている。思うに、一つの要因はスピリチュアリティを自分自身に持てないがために、他人にもそれを認められない人々が多いことにあるのではないか。人間の尊厳を抽象的な理念だけではなく、感情を伴った経験として体得する場が必要である。

今回の会議では、ヨーロッパ、アジアの宗教研究者、NGO 活動家、社会批評家達が、グローバリゼーションによって破壊された人間の尊厳と社会の共同性を回復しようとする強い意気込みを感じた。日本も人ごとではない。われわれはどのような文化的資源をもち、どのような社会を作り上げようとしているのか、真面目に考えるべき時ではないか。